



このシリーズは、基本的に諸外国で日本語教育に携わっている諸先輩の活躍をお伝えする趣旨で始まっていますが、最近では国内での就職希望者も多いので、今回は大阪にある日本語教育界の老舗、大阪日本語教育センターで10年のキャリアを持つ中堅として活躍している石倉さやかさんに日本語教育現場の一端を語っていただこうとおもいます。その前に簡単に彼女の勤めている大阪日本語教育センターについて説明しておきましょう。設立当初は、外務省の外郭団体として（財）関西国際学友会として1956年6月8日に発足し、

1967年10月1日に日本語教室を開設し1979年4月1日からは所管官庁が外務省から文部省に移管され、2004年4月1日からは独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）大阪日本語教育センターとして、益々時代の要請に答えている学校です。尚、JASSOとは独立行政法人日本学生支援機構は、独立行政法人通則法（平成11年法律第103号）及び独立行政法人日本学生支援機構法（平成15年法律第94号）に基づき、日本育英会において実施してきた日本人学生への奨学金貸与事業、日本国際教育協会、内外学生センター、国際学友会、関西国際学友会の各公益法人において実施してきた留学生交流事業及び国が実施してきた留学生に対する奨学金の給付事業や学生生活調査等の事業を整理・統合し、学生支援事業を総合的に実施する文部科学省所管の独立行政法人として、平成16年4月1日に設立された日本の留学生関係の事業を一手に引き受けている唯一の政府関連機関です。

さあ、石倉さんに続くのは誰でしょう？次はあなたの番かも！「目指せ日本語教師。はばたけ世界へ！」

1999年3月卒業 石倉 さやか

私が日本語教師という職業に興味を持ったのは高校生の時でした。「一生勉強できる仕事」そんなことを思ってこの職業を選びました。その後、高知大学に入学し、恩師のおかげで大阪の日本語学校で日本語を教えることになりました。今と違って、当時高知大学の人文学部では日本語のコースがなかったため、日本語や日本語教育に関する講義はごくわずかでした。ですから、知識も経験もないまま日本語学校に勤めることになり、はじめの頃は不安ばかりでした。

「ここに木があります」「ここには木があります」「ここに木はあります」「ここには木はあります」この4つはどう違いますか。

これは教え始めた頃の中国の学生からの質問です。その時うまく説明できませんでした。その後も、「大体」と「ほとんど」はどう違いますか、「つもり」と「予定」はどう違いますか、などなど。使えるのに説明できない。こんな質問に日々悪戦苦闘し、日本語の難しさを痛感しました。最近では少しは学生の質問を予測できるようになったものの、まだまだドキッとさせられることがあります。

また、質問は日本語に関してだけでなく、銀行のカードを落としたがどうしたらいいか？あの大学への行き方は？安いパソコンはどこで買えるか？など、生活面での質問も多いです。水族館に行けば、見知らぬ魚の名前を質問され、夏になれば盆踊りを踊ってほしい、アニメ「ナルト」の忍法についての質問など、その分野はこちらの予想を超えています。

10代後半から20代前半の多感な時を慣れない外国で一人で過ごすというのは、想像以上に大変なことだと思います。そんな日本という国を体感している彼らの質問は、長年日本人をしていても気がつかなかった日本や日本語についてで、教えられることが多いです。知っているはずの日本や日本語が、留学生を通して違ったものに見えるこの感覚が、たまらなくおもしろいと思っています。

「一生勉強できる仕事だから日本語教師に」高校生の私は大学入学試験の面接のために格好付けてそんなことを言いました。今、まさに勉強の日々。こんな刺激的な毎日ではほかの職業では味わえないのでは？仕事を始めて10年余りが過ぎた今、そう思っています。

